

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
大学院学生研究
2020年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	社会学研究科	社会学 専攻
研究代表者 (2021年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 2年 (学生番号: 19SB002K)		小松 恵 印
指導教員	所属部局・職		氏名
	社会学部・教授		岩間 暁子 印
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 社会	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題	記憶の構築によるコミュニティ形成 : エスニック・マイノリティの生活経験に着目して		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2021年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	社会学研究科社会学専攻 博士課程後期課程2年次		小松 恵
研究期間	2020 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 150,000円 / (採択金額) 150,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

社会的に周辺化されてきたエスニック・マイノリティ女性高齢者の経験の記憶を可視化することと、オールドカマー、ニューカマー、日本人が参加し協働することができる多文化・多民族コミュニティの形成の関連性について検討している。これにより、在日コリアン1世から後続世代やニューカマーへの実践の連続性も考慮した上で、地域で孤立しがちなエスニック・マイノリティ高齢者も包摂可能な多文化・多民族コミュニティ研究として、また、そうしたコミュニティの形成を可能とするエスニック・マイノリティ女性が経験を語り記録に残すプロセスに着目した記憶研究として、本研究を位置づけることを目的としている。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[エスニック・マイノリティ] [コミュニティ] [記憶]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**【背景と目的】**

1990年代頃から在日コリアン1世が高齢化し、地域での孤立が問題として顕在化してきた。その背景には、高齢期を迎えたことにより個人的に集い交流していた場が減少したこと、日本国籍を持たない者が国民年金制度から排除されていたことによる無年金と経済的困窮、被差別経験や文化の違いによる福祉施設利用への抵抗感などがあった。特に在日コリアン1世の女性は、学校教育を受けた経験がなく非識字の問題を抱えていることも多く、男性中心の民族団体では周辺的な地位に置かれてきた。さらに、近年では在日コリアン2世以降の世代やニューカマーの高齢者も増加しており、在日コリアン1世と時代背景は異なるが、女性であることにより周辺化されてきたことやニューカマーの場合には日本語教育を受ける機会を十分に得られないまま高齢期を迎えていることなど、経験の共通性が見出される点も多い。そのため、ジェンダーの視点を含めた上で、在日コリアン1世から後続世代やニューカマーへの実践の連続性も考慮し、エスニック・マイノリティ高齢者を包摂し、オールドカマー、ニューカマー、日本人が参加し協働することができる多文化・多民族コミュニティの研究が必要と考えられるが、こうした社会学的研究は管見の限りほとんど見られない。また、これまでの報告者の研究では、経験を語りあい、作文や絵で表現することが、エスニック・マイノリティ女性高齢者が参加可能なコミュニティを形成する一つの要因となっていることを示してきた(小松2018)。一部地域において生活史の聞き書きなどが始められてはいるものの、そうした実践がコミュニティに与える影響については未だ検討されていない。以上をふまえ、本研究では経験を語り、書き残す実践に携わる人々の関係性やその社会的・地域的文脈を検討することで、エスニック・マイノリティ女性高齢者の経験を可視化する試みが、多文化・多民族コミュニティの形成に与えた影響を明らかにする。

多文化・多民族コミュニティの形成プロセスを検討するための理論枠組みとして、G. Delanty (2003=2006) のコミュニティ論に依拠し、コミュニティを均質性に基つき形成されるものというよりも、複数の文脈からコミュニケーティブに帰属や意味が構築されるものとして捉える。ただし、Delanty のコミュニティ論には、場所性や身体性、構造的に周辺化された人々がコミュニケーションに参加するための条件などの課題が残されている。本研究は、在日コリアンと日本人が連帯して権利獲得運動を行い、現在まで取り組みを続けている川崎市ふれあい館の高齢者事業という具体的な場所での人々の相互行為に着目し、エスニック・マイノリティ女性高齢者を包摂可能なコミュニティを検討する点で、コミュニティ論に新たな知見を加えることができると考える。また、従来、社会学的な記憶の研究では特定の歴史的出来事をめぐる集合的記憶のポリティクスが検討されることが多く、集団内部の個人の経験の多様性や生活史が可視化されるプロセスは理論的には明確に位置づけられていない。そのため、本研究では、コミュニティ論と記憶論を接合することで、周辺化されてきたエスニック・マイノリティ女性高齢者が経験を語ることを通してコミュニケーションに参加し、それによって形成されてきた多文化・多民族コミュニティを捉えることを目的とする。

【対象と方法】

調査対象は、多様な背景を持つ地域住民の共生のための取り組みを続けてきた川崎市ふれあい館の高齢者事業「ウリマダン(朝鮮語: 私たちの広場)」である。報告者は自身もボランティアとして参加しながら、参与観察調査と参加者への半構造化インタビュー調査、関連資料の分析を継続している。ウリマダン是在日コリアン1世女性を対象に始められた識字学級が前身であり、現在では在日コリアン1世だけではなく2世やニューカマーの高齢者も参加しており、作文や絵などでエスニック・マイノリティ高齢者の生活史を表現・記録・発信する場にもなっている。

【2020年度の研究成果】

2020年度は、オールドカマー、ニューカマー、日本人が参加し協働可能な多文化・多民族コミュニティの形成にボランティアがどのような役割を果たしてきたのかについて、口頭報告3件(学会報告2件、研究会報告1件)の研究発表を公表した。まず、日本の多文化・多民族的な要素を持つコミュニティを対象とした従来の研究では、地域住民同士の関係性やエスニック・マイノリティ自身が積極的にネットワークを形成する側面に注目されることが多く、コミュニティに関わるボランティアの存在には言及されつつも詳細には検討されてこなかった(広田2003; 谷2015など)。一方、エスニック・マイノリティへの支援を行うボランティアを対象とした研究では、エスニック・マイノリティとボランティアとの間に存在する非対称な関係性を指摘した研究(山根2017)や、親密圏を築くことがそうした関係性の自己反省につながることを示した研究(添田2008)もあるが、在日コリアン1世から後続世代やニューカマーへの実践の連続性という観点は導入されていない。そのため、ウリマダンに継続的に参加する「共同学習者」と呼ばれるボランティア5名(在日コリアン1名、日本人4名)と識字学級を担当していたふれあい館職員1名を対象とした調査結果から、多文化・多民族コミュニティにおけるボランティアの役割を検討した。

日本社会学会大会報告「多文化コミュニティの集合的記憶の構築におけるボランティアの役割—川崎市ふれあい館高齢者事業を事例として—」では、エスニック・マイノリティ女性高齢者の記憶の構築におけるボランティアの役

研究成果の概要 (つづき)

割に着目し、在日コリアン1世への実践の場から、在日コリアン2世やニューカマーも継続的に参加可能な場へとコミュニティが変容してきたことを明らかにした。識字学級の開設当初はボランティアと在日コリアン1世との間で一方的な〈教える—教えられる〉関係のもと文字学習が行われていたが、在日コリアン1世の生活に寄り添った教材をボランティアが作成したことを機に生活史が語られるようになっていった。その後、在日コリアン1世だけではなく2世やニューカマーの高齢者の参加が増え、ボランティアが1世との実践を基盤としながらも新たな参加者には従来の文字学習には限定されない個別の要望があることを理解し対応してきたことで、生活史を書き残す実践が続けられてきた。これらの調査結果からは、ボランティアが、第1に在日コリアン1世の生活史を集合的記憶として構築するきっかけを創出する役割、第2に在日コリアン1世との実践を継承・発展させる役割を果たしてきており、ボランティアも生活史から〈共に学ぶ〉という双方向的な関係性が形成されていることにより、【文字学習の場】→【高齢になっても生活史を書き残せる場】→【多様な学びをもとに生活史を書き残せる場】として場の意味が変容していくことで多文化・多民族コミュニティが形成・維持されてきたことを示した。

オラリティ研究会報告『『ハルモニ』の記憶—川崎市ふれあい館高齢者事業における生活史を書き残す実践に着目して—』では、識字学級やウリマダンで用いられてきた具体的な資料を提示しながら、エスニック・マイノリティ女性高齢者の経験を綴った作文がどのように書かれてきたのかを明らかにした。マイノリティの経験の語りに関する先行研究では、語り手と聞き手の相互構築性やマジョリティ側の権力性の存在が示されてきた。報告では、ボランティアがエスニック・マイノリティ女性高齢者の語りや作文に与える影響について、作文を書くときに使用する教材と、作文を書くときのボランティアのエスニック・マイノリティ女性高齢者への関わり方を分析した。その結果、上述したような参加者の構成の変化への対応に加え、ボランティア自身が関わり方を問い直すことで、作文を書くときの教材と関係性のあり方も変容してきていることが明らかとなった。また、参与観察調査の結果からは、教材やボランティアが意図したテーマ以外の内容の語りや作文が生まれる場合もあり、識字学級からウリマダンに至るまでの実践の積み重ねの結果、ボランティアによって規定されるだけではない内容が語られ、作文に書き残されていることも判明した。

立教社会学会報告「エスニック・マイノリティ女性が語ることを可能とする多文化コミュニティ：川崎市ふれあい館高齢者事業におけるボランティアとの関係性に着目して」では、ウリマダンという多文化・多民族コミュニティにおいて、エスニック・マイノリティ女性高齢者が経験を語るということがどのように可能となってきたのかについて、作文を書く場面以外でのボランティアとエスニック・マイノリティ女性高齢者との関係性にも着目して検討した。ウリマダンでは作文の他にも絵やすごろく、かるた作りなど多様な活動を行っており、活動の前後に談笑したり日頃の心配事を共有することも多い。そうした親密なコミュニケーションによって築かれた関係も、エスニック・マイノリティ女性高齢者の背景や人間性の理解につながり、それをもとに語りの引き出し方を模索し、作文を書く場面でも相手にあわせたエンパワメントを重視してきたことで、教材や関わり方も変容させることができたことが明らかとなった。これにより、エスニック・マイノリティ女性高齢者にとってもボランティアにとっても、ウリマダンに【居場所】としての意味も見出されることで実践が継続され、経験を語るということが可能となってきたと結論づけた。

以上の研究成果によって、ふれあい館を中心に行われてきた運動や培われてきた信頼関係を土台とし、識字学級からウリマダンに至るまでの参加者構成の変化に応じて、コミュニケーションの積み重ねの中でボランティアのエスニック・マイノリティ女性高齢者への関わり方も変化させてきたことにより場の意味が変容してきたことで、在日コリアン1世から2世やニューカマーも参加可能な多文化・多民族コミュニティが形成されてきたことを示すことができた。

参考文献

Delanty Gerard, 2003, *Community*, London: Routledge (=2006, 山之内靖・伊藤茂訳『コミュニティ グローバル化と社会理論の変容』NTT出版)。

小松恵, 2018, 「高齢期における在日コリアンのアイデンティティと生活経験——川崎市ふれあい館の取り組みから」, 『立教大学社会学研究科年報』25: 51-60.

広田康生, 2003, 『新版 エスニシティと都市』有信堂.

添田祥史, 2008, 「識字実践における親密圏に関する一考察」, 『飛梅論集』8: 37-52.

谷富夫, 2015, 『民族関係の都市社会学 大阪猪飼野のフィールドワーク』ミネルヴァ書房.

山根実紀, 2017, 『オモニがうたう竹田の子守唄 在日朝鮮人女性の学びとポスト植民地問題』インパクト出版会.

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

なし

② 図書

なし

③ シンポジウム・公開講演会等の開催

なし

④ その他

【学会発表】

1. 小松恵, 2020, 「多文化コミュニティの集合的記憶の構築におけるボランティアの役割——川崎市ふれあい館高齢者事業を事例として——」, 日本社会学会大会 (2020年11月1日, オンライン) .
2. 小松恵, 2021, 「エスニック・マイノリティ女性が語ることを可能とする多文化コミュニティ: 川崎市ふれあい館高齢者事業におけるボランティアとの関係性に着目して」, 立教社会学会 (2021年3月27日, オンライン) .

【研究会報告】

3. 小松恵, 2021, 「『ハルモニ』の記憶——川崎市ふれあい館高齢者事業における生活史を書き残す実践に着目して——」, オラリティ研究会 (2021年2月27日, オンライン) .

以上